

1) 自己紹介(授業開きのようすを含めて)

参加者: 1年 濱・山口・内藤・山根・岡田

2年 渋谷・鍵谷

3年 金田

4年 石田・川野

6年 中野・村上

担任外 横江・小幡・吉川 計 15名

2) 教材解釈と授業展開を考える

各学年の教材を、分かれて検討し合った。

○1年「はなのみち」

文・ことばに目を向けるが、「絵本」なので、解釈の補足として絵を活用。

解釈

・3場面のすべてに「くまさんは」ではなく、「くまさんが」が使われているのは、シナリオのト書きのように、その場面(絵)の説明をするという「絵本」の形で表現されているからか? くまさんが何か探し物をしていると、中に何かわからないものが入ったふくろを見つけた。それが何であるかを尋ねに、友だちであるりすさんのうちに行った。しかし、ふくろの口を開けて中をのぞくと、そこには何も入っていなかった。穴が空いていたことに気づかなかったことを悔いるくまさん。その後、冬が終わり春風が吹き始めたころ、くまさんのうちからりすさんのうちまで、花でできた一本道ができていて、そこで、やっと、くまさんは、袋の中のものが花の種だったことに気づく。題名の「はなのみち」から思い浮かぶのは、「両側に花が咲いている道」であるが、この道は、花によってできた一本道で、その上を歩く道ではなかったんだと、最後の場面で気づくことになる。

授業展開で注意する点

・あくまでも、絵ではなく、文を読み取る力を付ける授業をめざすが、読み取りの補足として、「あたたかいかぜが、ふきはじめました。」で、冬から春に変わったことを読み取る際に、絵でも、その違いを味わうとよいのではないか。初めの場面の「みつける」も、何かを探していて興味惹かれるものを発見したという意味を補足するということで、絵(戸棚からたくさんのものを引っ張り出しているようす)を使う。

○2年「ふきのとう」

解釈

最後の文が、「もう、はるです。」ではなく、「もう、すっかり はるです。」になってい

るのは、どうしてか？というところから考え合っていき、以下のような解釈になった。

竹やぶの中は、夜は寒く、雪がまだ少し残っていて、ふきのとうは、頭の上の雪をどけられなくて、こまっている。(外が見たいな。)雪は、そのことを申し訳なく思うが、竹やぶのかげになって、お日さまがあたらないのでとけられなくてこまっている。(早くとけて水になり、とおくへ行ってあそびたい。)そのことを申し訳なく思う竹やぶだが、春風が来ないと、揺れて踊って雪に日があたる状態にならないので、困っている。(ゆれておどりたい。)それを知ったお日さまが、ねぼうしている春風を起こしてくれる。すると、竹やぶの中に、順番に春が訪れる。まず、①竹やぶがゆれる、ゆれる、おどる。(ふかれて、ゆれて、)→②雪がとける、とける、水になる。(とけて、)→③ふきのとうがふんばる、せがのびる。(ふんばって、一もっこり。)→ふきのとうが、顔を出して、「こんにちは。」ここで、竹やぶの中が余すところなく(すっかり)春になった。つまり、春は、すべてのもの、すべての場所に、一斉には訪れず、徐々にやってくる。そのゴールが、ふきのとう。ここで、春の訪れ完了。

授業展開で注意する点

・子どもたちが興味を惹かれる問題を設定する必要がある。このお話には、段落がないので、1文ずつに番号を打っていき、「竹やぶに春が届いたのは、何番の文から？」という問題を設定して、「はるかぜにふかれて、竹やぶがゆれる、ゆれる、おどる。」の文からということに気づかせる展開は、どうか？

・ふきのとう、雪、竹やぶが、春にどんなことをしたいのかが書かれている文「～たい」(「外が見たいな。」「早くとけて水になり、とおくへ行ってあそびたい。」「ゆれておどりたい。」)を見つけさせるのも、上記の問題を解くうえで有効か？

○3年「きつつきの商売」

解釈(部分的)

・雨の音が、「とくとく、とくべつメニュー」のわけは、「今朝、できたばかりの、できたて」で「もしかしたら、あしたはできないかもしれないから、メニューに書こうか書くまいか考えているもの」だから？

・雨の音が「ただ」なわけは、きつつきが作る音ではないから？

・ねずみの家族にとって、やりたいことが何もできなくなる原因の厄介な「雨」が、きつつきの「おとや」に来て、とくべつメニューとして聴くことで、いつまでも聴いていたい感動的な存在に変身した。これは、開店後まっさきにやってきた野うさぎが、ふだんから見慣れた存在のぶなの木の音にうっとりすることと共通している？つまり、きつつきの商売は、「日常のさまざまな音の隠された(気づいていない)魅力にふれさせてくれるものなのか？

*まだ、解釈が不十分です。

○4年「一つの花」

解釈（部分的）

・「そんなとき、お父さんが、きまってゆみ子をめちゃくちゃに高い高いをする」のは、どんな理由なのか。それは、お父さんのことば「」の中のどの部分なのか？→選ぶ決め手に欠けるか？

・お父さんがめちゃくちゃに高い高いをする気持ちについて考えさせるべきか？→「めちゃくちゃに」の意味から、ゆみ子を喜ばせるためではない。

*まだ、すっきりする解釈に辿り着けていません。

○6年「帰り道」

解釈

・「周也視点の文の最後「投げそこなった」は、どの場面の何を指しているのか」ということで考え合った。

① 律の「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。ほんとに両方、好きなんだ。」のことばに対する応えのことばを言うことができなかったということ。→律の言葉を受け止めることはできた。しかし、投げ返すことはできなかった。・・・ということか？

② 「どっちも好きってのは、どっちも好きじゃないのと、いっしょじゃないの。」ということばのこと。→周也は暴投してしまったが、律は、帰り道に、きちんとその球を投げ返してきて、それを受け止めることができた。・・・ということか？

①の根拠は、「投げそこなった」を「投げられなかった」という意味だととらえたから。

②の根拠は、「投げそこなった」を「暴投した」という意味だととらえたから。「投げそびれた」なら、「投げる機会をのがした」だが・・・。

*「～そこなう」は、「～するのに失敗する」「～する機会を失う」の両方ある。結論は、まだ、出ていないが、①の方が自然か？

・「行こっか。」「うん。」は、いつもの関係性なら、「行こっか。」が周也で、「うん。」が律だが、ここでは、口が動かない状況の周也と、分かってもらえた気がして笑顔になりすっきりした律・・・なので、「行こっか。」が律で、「うん。」が周也だろう。「思っていることがうまく言えないこと」に劣等感を抱いていた律が、ここで、思っていることを言うことができた。「相手の言葉を受け止められないこと」がだめなところだと母親に小言を言われていた周也が、ここで、律の言葉をちゃんと受け止めることができた。お互いの弱点を乗り越え、よりよい関係になれたのではないか。

